

第3回研究発表会要旨

(1995年9月30日, 早稲田大学文学部第一会議室)

目的語文相関詞 es の Modalpartikel 化について

人見明宏

後域に生じた副文を予告・導入し、主文に生起する相関詞のうち、4格の目的語文相関詞 es (以下 es⁴) は、統語論上の振る舞いという点で他の相関詞とは異なり、これを統語論上他の相関詞と区別する必要が生じる。またその生起に関しては、主文の動詞によって「義務的」、「任意」および「生起しないもの」の三つに大別されるが、そのうち常に問題となるのはその生起が任意の相関詞である。この研究発表では、その生起が通常任意とされる、主文の動詞が伝達・知覚動詞の場合の es⁴ に焦点を絞って考察を行った。

まず es⁴ の統語論上の位置づけに関して、これが文肢としての三条件 (①前域に生起可能, ②他の要素との置換可能, ③他の要素による代入可能) のどれも完全には満たしていないことが明らかになる。このことから、es⁴ は文肢として性格の弱い存在であると結論づけられ、文肢と非文肢の中間的存在と位置づけられる。

この es⁴ と、文肢としての性格が同様に弱く、文肢と非文肢の中間的存在とされる Modalpartikel (以下 MP) には統語論上の類似性が認められるのである。MP の統語論上の特徴としては、a) 不変化詞、b) 前域での生起不可能、c) 他の要素との置換は通常不可能、d) 他のMPによる代入は可能、e) 文中での生起が任意、という点が挙げられる。d) に関しては、MP 間での代入は可能でありパラディグマを形成するが、es⁴ はこのパラディグマには属さない。しかし a) に関しては、es⁴ はもっぱらこの形態でのみ用いられるという点で、「一種の不変化詞」と言えよう。また b)、c) および e) に関しては、両者の一致が見られる。さらに音調上の特徴として、es⁴ も MP も強勢が置かれられないという共通点を有している。

このように統語論上および音調上の類似性が認められる es⁴ と MP には、意味機能の点でも類似性が認められるのではないかという推論が立てられる。この点に関しては、特に副文の命題に対する話者の心的態度という観点での具体例の分析から解明が試みられる。次の二列の場合：

(1) Ich bezweifle, daß er kommt.

(2) Ich bezweifle es, daß er kommt.

(1) では話者は目的語文の表す er kommt を「起こり得ること」として表現としているのに対し、同じ er kommt が (2) では (他人に主張されたり、またはそう信じられたりしたものとして) 話者によって既出のものとして扱われているのである。さらに複数の文例の分析から、このような伝達・知覚動詞の際に生起した es⁴ には、目的語文の命題を既出、既知、話題としてすでに確定したものと話者が見なしているという話者の心的態度を聞き手に伝える意味機能があることが、そしてこの点においても MP の意味機能の一つである話者の心的態度の表明との類似性が確認された。

このように es⁴ には、本来代名詞が有している名詞句の代用形としての照応性から、話者の心的態度の表明へとその意味機能の移行が確認され、統語論上、音調上および意味機能の点でも MP に近い存在として、その Modalpartikel 化という現象が認められるのである。